隣の世界と、遠い
隣の世界

隣の世界と、遠い隣の世界

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21826814

ヒュンマ, たまきず

2024/3/22～の「okosama」に合わせた小話です。
・ヒュンマちゃんの子供視点です。
・たまきずの勇者くんはヒュンマちゃんの子で、ラーハルトの弟子という設定がありました。それをフォローしたお話です。
・微妙に解説が足りませんが、たまきず組からのお話が書けたらそちらでフォロー予定です。
・お子様設定大好きな方はどうぞ！（苦手な方はご注意ください）
illust/106766779
illust/106751849
ビジュアルはこんな感じ。
妹ちゃんはこの小話が初出です。
苺はほぼ関係ありませんが、可愛かったので表紙絵で採用です(笑)

隣の世界と、遠い隣の世界

※たまきず（ダイ大のスマホゲーム略称）とクロスオーバー（コラボ？）しております。
　男の子がヒースくん（ヒースの花言葉は「孤独、謙遜、休息、博愛」）お兄ちゃん
　女の子はベルちゃん（ベルフラワーの花言葉は「感謝、誠実、不変」）妹ちゃん
　です。

推しCPのお子様が苦手な方もいらっしゃるので、改ページいたします。

「君の基礎を、使わせてね」

　そんなような言葉が聞こえた。

「お兄ちゃん、起きて！」
　目を覚ますと、胸の上に妹が乗っていた。
　重苦しいはずだ。
「ベル、起こし方はもう少し工夫して欲しいな」

よいせと妹を抱えながら起き上がる。
きゃっきゃっと楽しそうな妹を抱えて、台所へ向かい、彼女の席にベルを下ろす。
「父さん、母さん、おはよう。すぐに着替えてくる」
声を掛ければ、母親が「わかったわ」とにこやかに答えてくれる。父親似だという自分は、時間には比較的厳しい。だから、寝坊をする際には何かがあるのだろうと、父母共に察してくれる。
ありがたいことだが、理解があり過ぎて怖い気もする。
――――贅沢な悩みだな。
そう微苦笑して部屋に戻り、水差しから洗面器に水を移して洗面をする。
そこへ映る、自分と、なんだか黒い少年と……ピンクの……ドラキー？
『あーーー、お前はヒースの素だろう？』
少年が大きな声で指を差してくる。
声？
声らしいものは頭の中に響いて、周囲には届いていない。
そして、目を見開く。
自分にそっくりな、でも……なんだか不思議な少年。
その彼は、自分を見てにっこりと笑ってひらひらと手を振った。
そして、洗面器の中の幻影が消える。

たっぷりと、水面を見つめる。

「ヒース、どうかしたか？」
今度は父親が部屋まで訪ねてきた。
過保護だ。
でも、ありがたいことだと理解している。
「父さん、今、変な幻影が水面に見えて……ピンクのドラキーって、父さん見たことある？」
ボクの質問に、父は首を傾げ、そして首を捻（ひね）る。
「二等辺三角形の、スイカ」
「へ？」

父は、普段から寡黙で理知的だ……たぶん。父の友人たち曰く「あいつは、断然ボケだ」ということだが、ツッコミとボケというのがよくわからないので、なんだかわからない。
　母も、その人曰くボケらしい。
　会話のツッコミが追い付かなくて大変だと、よく自称大魔導士さまが仰っている。
「いや、変な記憶が……ないはずの記憶が甦ったんだ。まあ、ともかく、マァムの飯が冷める。早く来い」
　穏やかに笑って、父がボクの頭を撫でてから戻っていった。
　そのことになんだか、むふーと変な息が出るが、「わかった！」と答えて着替えを取り出す。
　黒のズボンにブーツ。シャツを着て、ブルーグレイの長めの上着をベルトで止める。
　そういえば、水面の向こうの彼は三つ編みをしていたな。
　自分は耳元はやや長いが、短髪だ。
「ま、いっか」
　お腹空いた。
　ボクは足取り軽く、台所へ向かう。

　◇

　夜、洗面器に水を張る。
　また黒い少年が映るかもしれないと思って……

　ちょっと……だいぶ待ったけれど、やっぱり何も映らなくて……ボクは溜息を吐いて、ベッドに入った。

夢を見た。
　ボクに似た耳元に三つ編みのある少年が、黒い少年とピンクのドラキーと楽しそうに旅をしている。
　焚火を盛大に燃やしたり、せっかく手に入れた肉を焦がしそうになったり、寝惚けて必殺技を繰り出してしまい、周囲の凶暴な動物をやっつけたり、そしてその凶暴な動物の肉がマズかったり。
　ボクはくすくすと笑いながら、夢を見る。

　元気でよかったね。

　ボクは、ふと目の合ったボクに向かって、笑って手を振った。

　こんにちは。
　遠い隣の世界のボク。
　元気でね。

　翌日、目が覚めたボクはパジャマのまま父さんと母さんがいるリビングへ走る。
「父さん、母さん、ボク、旅に出る！！」
　二人は目をぱちぱちとさせてから、そして笑った。
「ちゃんと、旅の知識を得てからならいいわよ」
「旅をするなら実地もいるな。料理もある程度はできないと辛いぞ」
　思った通り、二人は即答だ。
「あたしも行く！！」
　妹が泣き叫ぶのも想定内。
「ベルはまだ駄目よ。一緒に行きたいなら、もっと体力をつけなくちゃ」
「いや、ベルが旅に出るならオレも付いて行く」
「パパが一緒はいやー！！」

父が、無言で傷付いていた。
　そんな父を見て、母が笑う。
「とりあえず、一人旅は心配だからいったんは仲間と旅に出て欲しいわ」
「そうだな、家族での旅は何度もしたがまだまだ気配察知や危機管理能力が足りない」
「それは父さんが母さんの前だと張り切り過ぎて、ボクにさせてくれないからじゃないか」
　ぷんすこしてしまう。
　いいカッコしいなんだよ、父さんは。
　殺気も鋭過ぎるし。
「邪魔するぞ」
　むっとしていたら、勝手知ったり親友の家という感じでラーハルトさんが入ってきた。
「師匠！！」
「勝手に師匠と言うな」
　いつもの表情でラーハルト師匠がボクの頭をぐしゃぐしゃにする。
　えへへ～。
　ラーハルト師匠が本当は嫌がっていないのは知ってる。
　ボクはラーハルト師匠の槍での演舞を見てから彼のファンだ。ボクの推しだ。推しって言葉はレオナ王から聞いた。レオナ王って言うと怒られるので、普段はレオナお姉ちゃんと呼んでいる。
「師匠、ボク、一人旅をするんです！」
　ウキウキと報告をすれば、師匠は無言になってボクを見つめ、それから父さんを見つめた。
　怪訝な顔で。
「……ヒース、両親が後方探知できない的確な距離で付いてくる旅は、一人旅とは言わないぞ」
　へ？　と思って父を見れば、気まずそうな顔をしている。
　母さんはにこにこと笑っている。当然でしょう？　と顔が言っている。
　するつもりだったな。

むすっと頬を膨らませれば、師匠の大きな手が頭を撫でる。
「元々、お前はヒュンケル達とよく旅をしていたんだ。ある程度の知識をアップデートすれば、オレの旅に付いてこられるだろう？」
　この言い方は……
「はい！」
「しばらくは、ネイル村の宿に泊まっている。オレが旅に出る前に身支度を整えろ」
「わかりました、師匠！！」

　それからは、慌ただしく身支度と知識の吸収を進めて、村のみんなに見送られて旅に出た。
「人種の知識はないからな、腹が減った、トイレ、眠たい、疲れたは遠慮なく言え」
　その言葉に嬉しくなってしまう。
「はい、師匠」
　夢で見た立派な槍ではないけれど、ボクはノヴァさん作・監修ロン・ベルク大先生の槍を手に進む。
「そういえば、師匠はピンクのドラキーって、見たことありますか？」
「ピンクの、ドラキー？」
　首を傾げる師匠は格好いい。
「スイカを二等辺三角？」
　ぽつりと飛び出た言葉に瞬く。
「父さんも、同じことを言っていました。ちなみに母さんは手袋って呟きましたよ」
「ふーん、まあピンクのドラキーが煩かったという、ないはずの記憶はあるな」
　顎に手を当て考える師匠。
「次元の違い、平行世界……そういう考え方があるということは聞いたことがある」
「じげん、へいこう？」

ラーハルト師匠はひょいっと飛んで、頭上の木に実っていた果実をもいだ。
　格好いい。
「この実を食べる未来。食べない未来。未来にはふたつある。いや、他にもオレと半分こをする未来。オレに取られる未来。無限にあるだろう」
「？」
「ぷはっ！　わからないと目を見開いて首を傾げるのは父親と同じだな」
　それはちょっと嫌だな～。
「そういう選択によって変わる世界を、平行していると考えれば、今、実を食べるヒースと、食べないヒースがいると考えられる」
「難しいです」
「オレも言っていてわからなくなったな。食べるか？　渋柿」
「いりません」
　ボクはノーと言える男だ。
「……世界には、たくさんの隣があるんですね。煩いピンクのドラキーがいる世界もあるかもしれない」
「この目で見ていないものを否定するのは、些か尚早だろう。だからあるかもしれないと思うのはいいことだ」
「はい。自分の目で確認するのは大事ですね」
　言い切って見上げれば、師匠は目をやや見開いて、そして苦笑を零した。

「さて、まずはどこへ行く？」
「師匠は、どこか行きたいところはありますか？」
　ボクは質問に質問を返す。
　卑怯だとわかるけれど、『行きたいところ』をボクはまだ知らない。
「……墓参……いや、どうするかな」
「ボサンがいいです、ボク」

「……墓参の意味を知っているのか？」
「知りません！」
「……あの女の息子だけあるな、お前は。まあ、いい。じゃあ、しばらくはオレの用事に付き合え。墓の下だが、父親や仲間にお前を紹介しよう」
「はいっ！」

ボクは旅に出た。
元気に楽しく旅をしている。

月明かりの水面に、時折三人の姿が映ることもあったけれど、ボクはいつも笑って手を振る。
そして、三つ編みのボクも笑って手を振ってくれる。

どうか、小さな幸せが君にたくさん振らんことを……
ボクと違う世界にいる、ボクと同じ君へ。

おしまい

……＊＊＊……＊＊……＊＊＊……

「淋しくなるわね」
「……ヒースも十二歳だ。旅に出るのに早くはないだろう」
　私の言葉に、ヒュンケルは腕の中の娘の寝顔を見ながら答えてくれる。
　全身が淋しいと言っている。
「ラーハルトが一緒なら安心ね」
「ああ」
「……そういえば、ヒースにピンクのドラキーのことを聞かれたのだが、マァムは記憶にあるか？」
「私も聞かれたけれど……あげた記憶がないのに、あなたに手袋をプレゼントした記憶があるの」
「……確かに、手袋はないな」
「ヒュンケルったら、真冬で吹雪いているのに袖まくりをしていたの。とっても寒そうだったわ」
　くすくすと笑ってしまう。
　魔物がいて、魔界があって、大魔王がいたのだ。ない記憶が甦ることもあるかもしれない。
「オレは、お前と揃いの水着を着て楽しくスイカを切った記憶がある」
「……あ、私もその記憶、ある気がする。二等辺三角形」
　ついつい笑ってしまう。
「じゃあ、今年の夏はみんなでデルムリン島に行って、水着でスイカ割りをしましょう」
「いいな」
　微笑んで、そして娘を見つめるヒュンケル。
「……ふふ、悔しい？」
　意地悪く聞いてしまう。
「息子との男二人旅をラーハルトに取られて」
　くすっと笑えば、ヒュンケルは決まり悪そうに顔を逸らしてし

まった。
「ベルがもうちょっと大きくなったら、三人旅もいいわね」
「ああ」
「この子ってば、剣が得意みたいよ」
「……剣が？」
「ラーハルトの魔槍みたいな剣を作ってってノヴァにねだっていたわ。随分可愛い鎧化になるわね」
「親子で鎧化ができるな」
「……うーん、母さんが自分の話をあまりしない理由が今わかったわ」
　ちょっと恥ずかしい。
　親子二人でピンクの鎧化はちょっと照れくさい。
「きっと、ピンクーのドラキーちゃんだったら喜んでくれるわね」
　ふと思う。
「ああ、オレたちの馴れ初めとか吐かせようとするだろうな」
　ヒュンケルが、同じようにない記憶を口にする。
「不思議ね。ない記憶を実感するなんて」
「ああ、不思議だ。でも、それでいいだろう？」
　ヒュンケルがやさしい瞳で私を見つめる。
「そうね、世界は不思議で満ちていた方が、楽しいもの」
　私はヒュンケルの隣に座って、そっと寄り掛かる。
　息子のキースのことは心配していない。ううん、嘘。心配だけど、でも大丈夫。
　あの子は強いから。

　どうか、小さな幸せがたくさん振らんことを……
　ヒュンケルと私の、大切な息子であるあなたへ。

おしまい

……＊＊＊……＊＊……＊＊＊……

と、いうわけで魂の絆とのコラボでした。
魂の絆がなければ、息子ちゃん妄想はしなかっただろうな～。

時折、ない記憶があったりしませんか？
初めてのはずなのに、なんだかしたことがあるような……
という感じです。

たまきずちゃん組の話も書きたいな～と思っています。